



芸術と平和

原爆の図丸木美術館

歴史・郷土学部・D班



◎はリーダー
前列
◎日比野志津子
芝 文子
佐藤キミ子
後列
○はサブリーダー
大木美行
神山 孝
田口 繁
○松本善弘

はじめに



丸木美術館の建物

「原爆の図丸木美術館」は、東松山市に住むものには馴染み深い名です。特に市内で育った子供たちでしたら社会見学などで、一度は訪れる機会があったと思います。

東松山市にとっては誇れるものの一つとして、国内外に知られたこの丸木美術館を挙げる方も多いことでしょう。ただ、こんな声を聞くことも。原爆の絵を前にすると、「すごく怖くて、足がすくんだ」「悲惨な絵を正視できなかった」な

どと聞かれます。確かにインパクトのある強い絵です。なぜ丸木夫妻は描くことにしたのか？ どうして東松山市にあるのか？ いろいろ疑問がわいてきて、調べてみようと考えました。市内にあるこの美術館を皆さんがもっと身近に感じてくれたらよいのではないかと思います。

1 原爆の図 《第1部 幽霊》 作品について

東松山市の自然に恵まれた都幾川のほとりに、小さな美術館があります。それが「原爆の図丸木美術館」です。絵の題名が付いている美術館は国内外にもあまり例をみません。画家丸木位里・俊が共同制作する「原爆の図」を展示するために開かれた美術館です。どんなにメディアが発達しても、その場所に足を運ばなければ感じられないものがあります。その場所に立ってみて、そこでしか伝えられないものを守り続けていくというのは、とても大切なことです。丸木夫妻は共同制作で原爆の図シリーズを発表してきました。どのような作品があるか紹介したいと思います。



図① 丸木夫妻の作成風景

1945年8月6日、広島に原爆投下の知らせを聞いた位里は広島の実家に向かいます。そこで焼け野原となった街と全身火傷を負って苦しみ死んでいく人々の姿を目の当たりにしました。俊も駆けつけ一ヶ月ほど広島に留まります。丸木夫妻はこの体験に基づき1948年夏に原爆を描こうと決意しました。被災した人々に焦点を絞り第1部として「原爆の図 幽霊」が制作され、夫妻は日本画と洋画の枠を超えた作品を生み出しました。

原爆で受けた悲惨な記憶を後世の人々に伝えていかなければならないという強い使命感が動機となったと思われます。丸木夫妻の迫真の原爆の図により被災者の辛さを観る側も共有することができます。

分かり合い理解してくれる事が、苦難に立ち向かっていかなければならない人々を励まし、生きていく力になるのでしょうか。人は誰でも楽しいことが好きです。もっと「明るい絵を」観たいと思う人もいるかもしれません。けれども、現実を直視し、生きてこそ人として成長するのだと信じて描いた絵だと思います。だからこそ夫妻の絵画は、未来を生きる私たちがどのように考え、生きていくのかを問いかける道しるべのような作品だと感じています。



図② 原爆の図 第1部 幽霊

「第1部 幽霊」は、被災者の行列です。一瞬にして衣類は燃え落ち、手や顔や胸はふくれ、紫色の水ぶくれは破れて、皮膚はぼろのようにたれさがり幽霊のように手を前方に出して行進しています。唯一母の胸に守られて生き残った赤ん坊がたった一人美しい姿のまま描かれています。赤ん坊だけでも生きていて欲しかったという画家の願いが見てとれます。

実際のところ、爆心地帯の地上の温度は6千度、近くの石段に人の影が焼き付いていたそうです。この状況を語り伝える人は誰も生き残っていないのです。

2 原爆の図 第1部発表後の作品

原爆の図第1部発表後、夫妻は次々と原爆の図を発表し、最終的にシリーズとして15部まで発表しています。



図③ 原爆の図 第2部 火

「第2部 火」には、炎に焼かれて悶え苦しむ人々の姿が描かれています。丸木夫妻は、この光景を実際に目にしたわけではありません。爆心地を体験するのは「死」を意味するのです。これを画家夫妻は想像力で表現したのです。この絵の群像は西洋的写実描写で描かれ「ミケランジェロのようだ」と評されることもありました。また、

朱色の炎が人を舐めるように描いており、日本の東洋の地獄絵図を想起させるとも言われました。制作を間近に見ていた若者の一人で、後に美術評論家となる、ヨシダ・ヨシエ氏は、互いの表現をぶつける「共闘制作」だったと語っています。



図④ 原爆の図 第3部 水

「第3部 水」は、色彩抑え水を求める人の群れ、川の中で息絶える人、積み上げた遺体の山という、三つの異なる時間の情景が、絵巻物のように連続して画面の右から左へ描かれています。ひときわ目を引くのは、中央の傷ついた母子像です。母子像は、傷ついた母が、死んだ子を抱いています。俊はそれを、20世紀の「絶望の母子像」と呼びました。

「第4部～第15部」は、題名が、虹・少年少女・原子野・竹やぶ・救出・焼津・署名・母子像・とうろう流し・米兵捕虜の死・からす・ながさき、と制作されていきます。

この連作の間、これらの絵は誰もがみられる、多くの人に伝える事を目的として国内巡回展を開きます。当時は、占領軍の圧力を警戒しての巡回展でした。輸送や展示の利便性を考えて、「第1部 幽霊」は、8本の掛け軸に仕立てなおしたおかげで、より全国巡回が可能になりました。

1950年代の文化運動の盛り上がりにもない「原爆の図」巡回展は、広島からスタートし、九州、山陰、大阪、群馬、神奈川、東北、京都、北海道と全国に拡大していきました。例えば、1951年7月に京都大学同学会の主催する「総合原爆展」が京都丸物百貨店で開催され11日間で、約3万人が入場しているのは驚きです。さらに国内だけでなくアジア、アフリカ、ヨーロッパなど20余ヶ国巡回し、1970年には全米でも大きな反響を呼びます。また、この米国巡回展において強力な応援者であった大学教授から、「仮に中国の画家が、あの日本兵による『南京虐殺事件』を描いて、日本で巡回展を開くとしたら、あなたがたはどう思いますか？」と質問され、夫婦は絶句しました。唯一の被爆国という立場で、告発の絵筆を握ってきた制作基盤を根底から揺さぶられたわけです。こうして、戦争の犠牲となったのは、日本ばかりではない事を恥じ、〈南京の虐殺〉〈アウシュビッツ〉〈三国同盟から三里塚まで〉と題された作品に展開していったのです。

3 丸木位里、俊のプロフィール



図⑤ 都幾川を背に…いのち溢れるくらし

丸木位里（1901～95年）

- ・1901年 広島県安佐北区安佐町飯室に丸木金助、スマの長男として生まれました。丸木家は太田川の油木地区で船宿経営と農業を営み、多くの人が入り交じる環境で少年時代を過ごしました。臨月の頃、母スマが階段から転落した事故により位里は生まれつき顔の右半分に痣がありました。このことで負い目を感じていた母は位里の生き方に干渉せず、本人の自由に任せていた為ののびのびと少年から青年期を過ごしました。
- ・1923年 絵の勉強をするために上京し、日本画家 田中頼璋に師事します。しかし、同年に起こった関東大震災後に田中頼璋が広島に拠点を移したため帰郷しました。
- ・1928年 第13回広島県美術展覧会に三段峡を題材にした（黒淵）で初入選します。
- ・1934年 再上京し、前衛芸術シュルレアリスムの影響を受けて水墨による抽象的表現を拓きました。1940年には第1回美術文化協会展に入選し、翌月同人となり、第6会展まで出展を続けました。
- ・1941年 7月に油彩画家の赤松俊子（その後、丸木俊子、さらに丸木俊と改名）と結婚。東京都豊島区长崎のアトリエ村の家同居しました。1945年8月に故郷の広島に原爆が投下されると、救援に駆けつけて現場で見た事や体験した事を俊と共同で「原爆の図」の連作を制作しました。また、現代日本美術展、日本国際美術展などに雄大かつ繊細な水墨画の発表を続けました。

丸木俊（1912～2000年）

- ・1912年 北海道秩父別村の善性寺に生まれました。旭川高等女学校、女子美術専門学校師範科西洋画部を卒業し、1937年迄の5年間市川尋常小学校で代用教員を務めました。
- ・1937～1938年 通訳官の子供の家庭教師としてモスクワに赴任。帰国後、東京都豊島区长崎のアトリエ村に住み1939年第26回二科展に入選。翌年、南洋群島パラオ諸島、ヤップ島などを旅しました。
- ・1941年 ソ連公使の子供の家庭教師として半年間、再びモスクワへ赴任。帰国後、丸木位里と結婚し、アトリエ村に住み日本美術文化協会展に出品続けました。
- ・1945年 位里の実家のある広島に原爆が投下されると、疎開先の埼玉県の浦和から駆けつけてその惨状を目撃しました。
- ・位里との共同で「原爆の図」15部まで連作に取り組み続けました。
- ・絵本作家としても数多くの作品を残し、1971年には「日本の伝説」文・松谷みよ子、絵を位里とともに担当し、第3回プラスチイスラヴァ世界絵本原画展でゴールデンアップル賞を受賞しました。1980年に「ひろしまのピカ」を刊行し、第3回絵本日本大賞を受賞、さらに全米図書館協会ミルドレッド・バチェスター賞、ボストングローブ・ホーンブック賞、ジェーン・アダムス平和賞などを受賞し、国内外で高く評価され15か国語圏で翻訳出版されました。
- ・1982年 絵本「みなまた海のこえ」文・石牟礼道子、絵を位里と共に担当し32回小学館絵画賞、1984年には絵本「おきなわ島のこえ」位里との共著で講談社文化賞・絵本賞など数々の賞を一緒に受賞しました。
- ・1986年 映画「劫火ーヒロシマからの旅」が公開され、1988年マサチューセッツ州立芸術大学から位里とともに名誉博士号を授与されました。
- ・1995年 ニューヨーク州立大学アルバニー校ローレンス・S・ウイトナー教授からノーベル平和賞候補として位里とともに選考委員会に推薦され、選には漏れましたが、同年エイボン女性大賞を受賞しました。また、位里とともに埼玉県民栄誉章受章、広島市市制功労者として表彰されました。翌1996年には朝日賞を受賞しました。

4 注目されるもう一人の人物 丸木スマ

この美術館には開館以来「原爆の図」とともに必ず展示されている絵があります。



丸木位里の母、丸木スマの作品です。スマは、生涯読み書きをせず、働きながら4人の子供を育てました。被爆翌年に夫を亡くし、息子位里夫婦に絵を勧められて筆を執りました。

それから、81歳で亡くなるまでに、身近な生き物や里山の風景など700点以上の絵を残しています。「むこうとそっくりにやってみようと思うがうまい具合にはいかんのう」「わしはわし流にやるより仕方ない」とスマ自身の言葉です。一見拙い描写には長い歳月をかけて育んだリアリティがあふれ、観る者を驚かせます。

図⑥ 丸木スマ

俊は、スマをどんな人の様に思っていたかという、「スマと話していたら際限もなく面白い」、「美術学校に行くと色々な事が制約され、上手く描こうとする。スマは、天衣無縫、自由に描く。子どもの絵のようにパッと出て描く」と言っています。そして、原爆についてあの名言を残します。「ピカは人が落とさなきゃ落ちてこん」と。



図⑦ めし



図⑧ ひまわり

コバルト色の葉と茎のひまわりです。スマは、独特の色彩と造形感覚で、自由に世界を表現しました。

- ・1951年 第5回～第10回女流画家協会展
- ・1951年 第36回～第38回院展、院友推挙
- ・1951年 第1回女流画家協会盛岡展出品
- ・1952年 丸木スマ個人展 130点出品と大活躍する。
- ・1956年 練馬の家で、位里、俊が世界巡回展中の留所に顔見知りの青年に殺害される。画室に未完成の菊の絵が残されていました。享年 81 歳。

5 丸木夫妻の日常風景



図⑨

丸木俊を囲んでシャボン玉の風景

近所の子供たちと子供のいない俊が楽しく遊んでいます。ここまでするには唐子の近所とのやり取りがありました。気さくな性格のお二人でしたが、始めは怖い絵を描く人で、中々周りの人達が寄って来ませんでした。ある少年達の関わりから、「絵を描いていて、面白い外国の話をしてくれる。」親たちは、可愛がってくれる夫妻に野菜を持ってお礼に訪れ交流が始まります。



図⑩



図⑪

1967年（昭和42年）位里の故郷の広島、太田川に似た東松山市下唐子の都幾川に美術館を建設。その前に住居があり、野木庵と名付けられたこの家には、広間の中心に囲炉裏があり、ここに集まって、毎日採れたもので食事を楽しんでいます。

家族のようですが、みんな丸木夫妻を慕って訪ねてきた人達で暮らしていました。

毎年恒例のとうろう流しの風景

8月6日に「ひろしま忌」で実施されたとうろう流し、参加者が平和と核兵器廃絶の願いを込めて、作ったとうろうを都幾川に流します。2020年、2021年は、新型コロナウイルス感染症の為、中止になりました。2022年大雨の影響や近年の河川の変化、感染症の急激な拡大により中止になりました。

6 丸木美術館の建物について

美術館に入り、絵を観ながら入って行くと「小高文庫にどうぞお入りください」というご案内があり、階段を上がります。



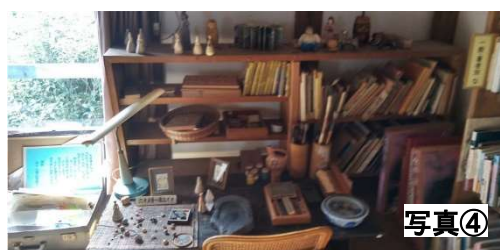
写真①
小高文庫入口



写真②
凄く太い材木の梁の組み方で出来た部屋



写真③
松平伊豆守休札



写真④
展示室兼丸木夫妻の書斎



写真⑤
夫妻の蔵書

左の写真は、「松平伊豆守休」と読めます。これは川越藩々主の松平伊豆守がお休みした所と分かります。

ここは、元々「旧本陣小高家」の屋敷の一部の建物であったということでした。それが、丸木美術館に移築され、夫妻の書斎として使用し、現在の

展示室となったのです。

この経緯は、江戸時代からの旧家である小高家から昭和20年代に小高屋敷全体を解体することとなったことから、その一部を聖ルカ幼稚園が園舎として利用するため移築したものです。さらに市内へ丸広百貨店が進出した際に建設予定地にあった幼稚園（現幼稚園は下青鳥）を移転させることとなったことに伴い、取り壊しを惜しむ方々、特に幼稚園の理事長であった田口弘氏が丸木美術館と交渉して移築することになりました。

また、移築とともに小高家関連文庫図書200冊以上が寄贈されたそうです。

あとがき

分からない事づくしから始まり、本を読みあさり、まず知って頂きたい事からは何かと考へ、原爆の図シリーズの中で、一番重要な絵を紹介しました。直接、丸木美術館で見て頂くきっかけになればと思います。そして、位里、俊の人柄が分かると、作品への親しみ方が違うのではと考へました。二人が作品を描き続けた情熱は、原爆投下後の実体験を伝え、平和を願う一念に尽きると考へます。

今、私たちはロシアによるウクライナ侵攻が起き、戦場の悲惨さを目の当たりにしています。原爆の図丸木美術館には、丸木夫妻の『一日も早くやめてもらいたいの戦争です。位里』『戦争やめよ。この時間にも人が死んでいるのです。俊』という言葉から始まるメッセージが入口の門に新たに掲げてありました。現在も丸木美術館の理念を支えていこうという職員の思いが感じられました。

参考文献・写真データ

- 宇佐美承（1978）『ルルの家の絵かきさん原爆の絵をかきつづける丸木夫妻の物語』偕成社
- 岡村幸宣（2015）『「原爆の図」全国巡回：占領下、100万人が観た！』新宿書房
- 岡村幸宣（2017）『「原爆の図」のある美術館：丸木位里、丸木俊の世界を伝える』岩波書店
- 岡村幸宣（2020）『未来へ原爆の図丸木美術館学芸員作業日誌 2011-2016』新宿書房
- 小沢節子（2002）『原爆の図：描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』岩波書店
- 楠木しげお（2012）『平和を願う「原爆の図」丸木位里・俊夫妻』銀の鈴社
- 菅原憲義（1996）『遺言：丸木位里・俊の五十年』青木書店
- 本橋成一（1987）『ふたりの画家：丸木位里・丸木俊の世界 本橋成一写真録』晶文社
- 丸木俊（2002）『女絵かきの誕生』朝日新聞社
- 東松山市本町研究会（2019）『東松山の今昔あれこれ郷土の歴史を考へる物語第2号』東松山教育委員会事務局市史編さん課編（1984）『東松山市史資料編第4巻』東松山市
- 図①「丸木夫妻の制作風景」丸木美術館にて撮影
- 岡村幸宣（2017）『《原爆の図》のある美術館：丸木位里、丸木俊の世界を伝える』岩波書店図②・図③P24～P25、図④P28～P29、図⑥・図⑧P8
- 図⑤「都幾川を背に…いのち溢れるくらし」丸木美術館パンフレット
- 丸木スマの絵、原爆の図丸木美術館 画像図⑦
- 本橋成一（2005）『ふたりの画家丸木位里・丸木俊の世界』図⑨P61、図⑩P42、図⑪P82 ポレポレタイムス社
- 丸木美術館内小高文庫 写真①～⑤の掲載の許可を頂きました。